

# ゆにゆに

## UNIVERSITY UNION

2005年12月1日

通巻1028号

発行：金沢大学教職員組合執行委員会  
〒920-1192 金沢市角間町  
TEL076-262-6009 角間内線2105  
E-MAIL kanazawa@ku-union.org



### 金沢大学版 地球の歩き方

## Scotland

### 《～グラスゴーとエディンバラ～》

吉川 一義 (教育学部)



今年8月初旬にISEC2005がスコットランドのストラスクライド大学で開催された(写真右)。特別な教育的ニーズをもつ子どもたちの教育に関する学会であり、「特別なニーズ教育」発祥の地・イギリスで5年に一度開かれる。

スコットランドへは、一旦ロンドンに入り、ここから約1時間半の空路により向った。着陸に備えて低空飛行する機内からは、広大な緑の丘と所々に規則正しい群れを成して建つ家々、その白い壁とオレンジ色の屋根瓦は絵本の挿絵のようだった。グラスゴー国際空港からグラスゴー中心部(終点：ブキャナン

バスステーション)までは、スコッティッシュ・シティ・リンク(バス)利用で20分ほど。ルートは市街中心部を巡るちょっとした市内観光である。乗車時、運転手に滞在先を告げておくと、そのルート沿いであれば近くで降ろしてくれる。グラスゴーはスコットランド最大の人口を抱える大都市で貿易と重工業を中心とした工業都市の印象が強かったが、劇場・博物館・ギャラリーと文化・芸術的施設も多く面白い。ロンドンより落ち着いた雰囲気を感じる。気温は17℃～23℃で少し寒い(日本では30℃を超える頃)。この頃、サッカーの中村俊介さんがセルティックに移籍したことを新聞とテレビで知った。グラスゴーはセルティックとレンジャースという共に世界的に有名なクラブチームのホームタウン。今、中村俊介さんは大活躍である。

さて、重厚な建物が歴史を感じさせる街並みは、歩いているだけで楽しい。朝はホテルを早く出て、カフェやコンビニ、公園に寄り道しながら、大学までの道のりを十分に楽しんだ。夕方7時に終わってホテルに戻るときは、勿論、真直ぐに帰らない。この季節、日照時間が長く午前4時～午後10時ごろまでは明るい。夕食をとった後も“明るい戸外”で活動できることが楽しくて仕方なかった。一方、食べ物については良い印象が無い。グリル料理・家庭料理の代表とされるサンデーローストを頂いたが、付け合せの温野菜は水煮状態で味が無い。結局、夕食はコンビニやファーストフード店でサンドイッチやフィッシュ&チップス、ス



ジョージ・スクエアの風景(グラスゴー)



繁華街・ブキャナン・ストリート(グラスゴー)



コティッシュビールを買い簡単に済ませる。日本食の店“Wagamama (わがママ)”があった。アレンジされていて日本食なのか？と驚くメニューもある。食に拘らない私でも遂に飽がきて、ホテルの朝食(イングリッシュBF)が最も楽しみとなった。

休日に、グラスゴーからスコットレイル(鉄道)で1時間のエディンバラへ足を運ぶ。スコットランドの首都。この街は、歴史的建造物が集まるオールドタウンと18世紀以降計画的に造られたニュータウンに分けられ、景色がとても対照的。オールドタウンには、天然の要塞・エディンバラ城が街を見下ろすよう

に建っている(写真左)。岩山を削って築き、400年間にわたる幾度も戦いで破壊と再建が繰り返され、その頑強な容貌に圧倒される。城内には牢獄や戦争博物館があり、特に牢獄の劣悪な環境と分厚い木製ドアに刻まれた囚人の言葉が痛々しい。とどめはベンチの眩き。城内の休憩ベンチに取り付けられた15cm四方の金属プレートには“あなたたちの今日のために わたしたちの明日を捧げたことを家族に話してほしい”と意味深く・重い言葉。かなり気分が沈む。重厚な城門を出て東に向う目抜き通り・ロイヤルマイル(1.6km)に踏み込むと、アイスブルーの空にストリートパフォーマンスが映え、バブやレストランのテラスは観光客で賑わう。重かった気分が少し楽になる。ロイヤルマイルの賑わいに慣れてくるとクロス・脇道(写真；下の左と中央)が気になる。ロイヤルマイルとクロスは、動静・明暗・主従と多くの点で見事に対比する。吸い込まれるような強い興味が喚起され、クロスから生活風景を覗き見ながらその積み重ねを思う。この後、時計塔がひととき印象的なバルモラルホテル(写真；下の右)のティールームでアフタヌーンティーを楽しんだ。飛込みだったので交渉に苦労した。かつてステーションホテルとして名を馳せた伝統的なホテルであり、外観や内装もあわせて楽しめる。楽しい時間だった。

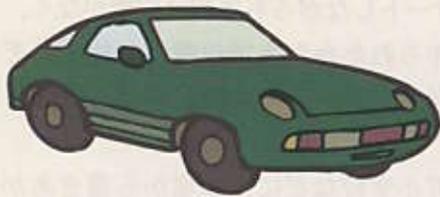


## 車の買い換えにあたっては ご注意を



直江 俊一 (工学部)

すでに半年をすぎたことであつたが、10年近く乗ってきた車を買換えることになった。これまで車について特別な知識も趣味もなく、たまたま購入した車が定評のある大衆車であり十分満足して乗っていた。この車種を廃止し、もっと良くなった車になるとのセールスの勧めにのせられ店頭展示の車を見る程度で購入した。ところが運転してみると様子が大きく異なっていた。走行時に常時小刻みの左右方向の振動があり、ローリングも顕著で、道路のアスファルトの段差でいどで上下の強い衝撃的振動があるという状況であつた。



当初メーカーも気がつかない不具合かと思ひディーラに対応を求めたが、次第にそれは無駄なことであることが分かった。従来車の基本を変えた事はメーカーの意図的なものであった。この10年の間に自動車産業の状況はすっかり変わっていたのである。日本のメーカーは国民車の開発を中心課題として発展してきた。ところが今やGMやフォードを追い越し、海外での売り上げが中心となってきている。車の構造設計にいわゆる「ヨーロッパ基準」が取り入れられ、新たに中国市場も対象になり、「国民車」基準を廃止し、この世界基準を「車とはこんなものです。多少振動があった方が居眠り運転防止になります。」として業界全体としてキャンペーンも開始されたと聞く。従来のどこを変え、「ヨーロッパ基準」によって車の構造がどう変わったかの説明は一切せずに推進されているようだ。環境対策、電子技術、内装、デザインなど課題が山積みなのは分かるが、安全で安心な走りの基本をくずし、そこでのコストダウンを計ることは決して許されることではない。不満なら高級車(排気量がやたらと多い)を買えばとメーカーは言いたいのであろう。100~200万円程度の車については構造部分を合理化してきていると思われる。私の前車の後輪のサスペンションは安価なトーションビーム方式であったがそれでもマルチリンクビームサスペンションという工夫されたもので評価を得ていたことが最近文献で判明したが、現在の車はどうなっているか全く分からない。メーカーが詳細を公表しないので、我々ユーザーにとっては車の詳細はほとんど分からないという運命に置かれている。日本の経済界の代表は今や自動車産業となっており、経済停滞に悩む国民にとって、その事をいくばくかの誇りと感じざるを得ない状況である。何故日本のメーカーがここ1~2年で世界市場を席巻するようになったのか、そしてまたその状況はいつまでも続くものではない。全世界的に自動車関連企業の人員削減、工場閉鎖の事件がおきている。ユーザの声を大切に、堅実な技術革新を企業発展の基本とするメーカーになってほしいと切に願うところである。



## 犀星校歌祭開かれる



「こぞりてわが学府につどへり」(金沢大学校歌より)

今井 直人 (附属小学校)

金沢生まれの文豪、室生犀星(1889~1962)は、詩や随筆、小説などに優れた作品を数多く残していますが、その一方、各地の学校の校歌も数多く作詞しています。そんな犀星の詞による校歌を持つ学校が集い、それぞれの校歌を歌いあう「犀星校歌祭」が催されました(11月19日 石川県教育会館)。

当日は金沢市内の小中学校を中心とした11校のステージがありましたが、実は、金沢大学と室生犀星も深いかわりをもっていたのです。金沢大学の校歌のほかに教育学部の附属小学校と附属高校の校歌をはじめ、それ以前には戦後金沢大学に包括された旧金沢高等師範学校の校歌や旧金沢医科大学附属薬学専門部(現薬学部)の愛唱歌「名無草」も犀星の作詞によるものです。昭和4年(1929)、薬学生有志が自らの思いで資金も出し合い作詞者と作曲者に依頼した「名



書簡



歌詞

無草」も犀星の作詞によるものです。昭和4年(1929)、薬学生有志が自らの思いで資金も出し合い作詞者と作曲者に依頼した「名



無草」、戦後新制大学としてスタートしながらも当初は校歌がなく、開学十周年の記念事業として作られた金沢大学校歌。各校それぞれの校歌にまつわるエピソードをステージの合間に紹介しながらのステージでした。

附属小学校や金沢市立菊川町小学校などに、犀星から書きあがった歌詞とともに送られた添書が残されています。それにはいずれも「校歌はきりっとしたほうがいい」「少しむつかしいかもしれないが、この方が無難」と書かれています。確かに、その方が

校歌らしいといえそうです。

自分に関係のない学校の校歌など、あまり用のないものですが、音楽科を担当している私にとっては、この日のステージは、同一詩人の歌詞を題材にして、作曲家の個性や作風の違いが感じ取ることができるとても興味深いものでした。

ほのぼのとした気品が感じられる弘田龍太郎(旧薬学、旧高等師範)、戦前戦中に軍歌の作曲も多いのに、さすがに校歌ではちょっとテンションを抑えた感じの信時潔(附属小、菊川町小)、「そうそう、文部省唱歌の感じ」とついイメージしてしまうのは下総皖一(附属高校)。耳にした瞬間、その音に引き込まれたのは山田耕筈(金沢市立小將町中)。単純な有節形式(同じ旋律で1番、2番…と歌詞がある)を前提にした歌詞ではなく、おそらくこれなら詩人犀星も存分に腕を振るえたはず。音の響きの繊細さにかけては山田耕筈はさすが。私は「赤とんぼ」より「からたちの花」を連想しました。

さて当日の想定外(主催者は期待していたらしいけれど)のエピソードを紹介しましょう。プログラムの最後、金沢大学の校歌は、歌うメンバーが揃わず中央公民館合唱団による代演で予定されていましたが、なんのなんの、客席から卒業生や旧職員が飛び入りでたくさん参加し、写真のような盛り上がりとなりました。ちなみに附属小学校は弦楽合奏部の伴奏と児童の合唱に、これも飛び入りでOGと旧職員が参加、附属高校はステージに加わった卒業生が会の終了後同窓会へとなだれこんだとか。

室生犀星を通して、言葉や音楽のすばらしさ、そして愛校心を確かめ合った一日でした。



Screen  
Review  
スクリーンレビュー

## 蝉 し じ れ

黒土三男監督 (2005年)

市川染五郎、木村佳乃、緒形拳、原田美枝子、今田耕司、加藤武 他

橋 洋平 (附属図書館)

近年、テレビドラマにしても映画にしても藤沢周平原作の時代劇が目立つ。黒土三男監督による「蝉しじれ」は、その中でも特に爽やかで泣かせる作品だった。この作品は、山田洋次監督の「たそがれ清兵衛」や「隠し剣鬼の爪」が短編をいくつか合わせるような形で映画化していたのに対して、長編をそのまま映画化しているのが特色だった。

この作品が成功したのは、主人公の牧文四郎という少年が色々な困難に合い、「人生の苦さ」を感じながら、それでも真っ直ぐに成長していくという"もともと素晴らしいストーリー展開"を小細工をせず、そのま



ま映像化した点にある。全編が見所の連続となっている(黒土監督は、数年前に放送されたNHKの連続テレビ時代劇「蝉しぐれ」の脚本も書いているので、もしかすると今回の映画版は、そのダイジェスト的な脚本となっているのかもしれない)。

このドラマの前半は、文四郎と2人の親友、近所の幼馴染みの少女ふくとの交流が爽やかに描かれる。美しい自然が彼らの演技の背景に常に描かれているのは山田作品と同様で、ドラマ全体に溢れる爽やかさの基調を作っている。その象徴がタイトルにもなっている“蝉しぐれ”である。その後、藤沢作品のお決まりのパターンでお家騒動に巻き込まれた文四郎の父が処刑されるというドラマが続く。言い訳をせず、寡黙に運命を引き受ける緒方拳の演じる父とその姿を見つめる文四郎がストレートに向き合う別れの方が印象的だった。

その後、文四郎が処刑場から自宅まで荷車を使って父の遺体を運ぶ場が続く。

暑い夏の日中、人通りの多い街中を1人で重い荷車を引く文四郎の姿と最後の最後の坂道で力尽きた文四郎を黙って手伝うふく。この過酷な場は、ドラマ前半のクライマックスだった。ふくの黒く大きな真剣な眼差しを見るだけで胸が詰まりそうになった。

反逆者として罰せられた父の死後、文四郎の苦難の時代となる。ここで文四郎役も市川染五郎に変わる。田舎の侍にしてはスマート過ぎる感じはあったが、青春ドラマ的なストーリー展開を受けるには相応しい。涼しげで若々しい表情を見せる一方、正統的な雰囲気を感じさせるのが素晴らしい。ふくの方は後半は上品なお姫様に一転し、役者も木村佳乃に変わる。文四郎同様、運命に翻弄されながらも、真っ直ぐに生きる姿をうまく演じていたが、こちらは子役時代の目の表情の印象があまりにも強かったので、少々印象が薄くなった。



後半に出てくる殺陣の場面は、山田洋次監督作品のリアリズムに一步譲るところがあった。若者2人で大勢の敵を撃退する場は、「ちょっと強すぎ？」という気がしないでもなかった。その後、ふくと文四郎が暗い夜の川を通過して、船で静かに抜け出す見せ場が続く(この場面は、文春文庫版の原作の表紙の絵にもなっている)。この部分ではハラハラした緊張感を感じさせるとともに、今田耕司の「口のうまさ」で難局を切り抜けるコメディ・リリーフ的なユーモアを感じさせてくれた。こういったメリハリが映画全体を見やすいものにしていった。

真っ直ぐに生きてきて、それぞれ立派な「大人」となった2人が最後に再会する。「もしも...だったら」という悔恨を残しつつも、お互いに人生を誠実に生きてきたことを称え合うようなせつない場は大変見ごたえがあった。映画全体は、回想シーンを交えて、感動的に締めくくられる。

この作品は、文四郎とふくの半生を、彼らを取り囲む個性的な人物と美しい自然によって膨らませながら、うまくまとめていた。娯楽作品的な親しみやすさと藤沢作品独特の品格の高さとのバランスも良く、誰もが楽しめる上質の作品に仕上がっていた。山田洋次監督の藤沢作品は、藤沢周平の原作を題材としながらも、山田監督の個性によってドラマが再構築されているようなところがあったが、今回の「蝉しぐれ」にはよりストレートに藤沢周平らしさが打ち出されていた。原作の「蝉しぐれ」自体、藤沢周平の代表作であるが、今回の映画版も「藤沢周平入門」には絶好の作品だと感じた。



イラスト 橋

あすめ

# ちよっせいは店

ママハウス

パンは火・木・土に焼きます  
電話 076-264-4078

## お母さんの手作りケーキ 「ママハウス」

小林 宏明 (教育学部)

街がクリスマスのイルミネーションに輝く季節がやってきました。「今年のクリスマスは何を食べよっかな～」とあれこれ考えたときに、きっとはずせないものがひとつあるはず。そう、ケーキです！今回はデパ地下では味わえない、ほっとするお母さんの手作りケーキを紹介します。



金沢のビバリーヒルズ？涌波公務員宿舎からほど近い、畑と水田に囲まれた緑豊かな住宅地にあるのが「ママハウス」です。ケーキはすべて卓球の達人でもあるママの手で一つ一つ手作り。材料・品質にこだわった安全で温かい素朴な味を大切にしています。おいしいケーキを店内でいただくこともOK。

さらに、火曜・木曜・土曜日はほっかほかのパンも登場します。ママハウスのパンは、ミネラル豊富な超・海洋深層水を使ったふわふわのもちもちパンです。ぜひ、ケーキと一緒に焼きたてのパンも味わってみてください。さあ、今年のクリスマス、ちょっとほっとする味で楽しみませんか。

お店でお好きなケーキとコーヒー2杯付きのおいしいコーヒーが飲めます。(ケーキセット 520円)



中央：シュークリーム 170円  
左：抹茶ケーキ 270円、右：レアチーズケーキ 250円



左：コーンパン 130円 右：ピザパン 160円  
(具がたっぷり)

金沢市涌波 3-8-25 営業時間 9:30~19:00

TEL 076-264-4078 FAX 076-261-6627

定休日 毎週日曜日・祝日

### 〇〇〇編集後記〇〇〇

「ゆにゆに」第1028号ができました。石黒が編集の担当者となって初めての「ゆにゆに」ですが、私の怠慢で刊行が遅れたことをおわびいたします。今回も旅行の話、車の話、音楽の話、お店の話いつもの形式ながら、色々な話題が集まりました。組合員の多士済々振りに、改めて感心した次第です。生活者無視の増税が取りざたされる中、いかにして少ない出費で生活の質を向上させるかが、関心の的となってきています。日々の豊かな生活づくりのために、「ゆにゆに」の記事をお役立ていただけたら幸いです。

(編集者/M・I)